
西新宿アシッドハイスクール九々九九式

シラカベヒロ氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

西新宿アシッドハイスクール九々九九式

【NZコード】

N1908V

【作者名】

シラカベヒロ氏

【あらすじ】

西新宿のアシッドなハイスクールで九々と九九が。

『如何にして殺人鬼界は発展を遂げたか』。

まず大前提として、世間には殺人鬼がわんさかいるつてことを覚えておいて欲しい。

これは僕の幼馴染であり現役殺人鬼の九流子流九くりゅうしうりゅうくがいつも言つていることだ。彼女は自称・未来の殺人鬼界を担う若きホープだそうで、そんなもん担つてどうするんだつて思うけど、まあそれはそれでとして。

子流九いわく、最近、殺人鬼界でもつぱら話題になつてているのは『顔泥棒』だそうだ。どういう奴かつていうと、まあそのままなんだけど、女の子の顔の皮を剥ぎ取つちゃう、つていう。それで、『顔泥棒』。ちなみに女の子限定つていうのがポイント。

でも実はこの『顔泥棒』、殺人鬼つてカテゴリーに入れるかどうかはちょっと微妙で、殺人鬼界でもかなり物議を醸してゐるらしい。というのも、顔を盗られて結果的にショック死なり出血過多なり自殺なりで死ぬ人もいれば、死なない人もいるから。実際、僕の通う西新宿東高校にしじんじゅくひがしうきゅう（ややこしい）にも四、五人、顔を盗られちゃつた人がいるけど、死んだ人はいない。入院してゐる、もしくは顔中に包帯ぐるぐる巻きつけた状態で登校してゐる（なにもそこまでして学校来なくてもいいのに、よっぽど学校が好きなんだなー、と思う）。

で。

実は、『顔泥棒』のことは結構どうでもよかつたりする。僕が話したいことはもつと別にある。

そもそも殺人鬼界つてなんだ。

いやもちろん広い世の中、色んな業界あることはわかる。僕自身、殺し屋つていうまあまあレア度の高い仕事をやつていて（中学二年のときからだから、もうかれこれ三年ほど身を置いてる）だから殺

し屋界つてものがあることを知つてゐる。でも、それにしても、殺人鬼界つてなんだよ、と。だつて殺人鬼つて仕事じやないじやんか、と。

「界つつつてもまあなに、そういうカチッとした業界的なのじやなくて、もっと漠然とした、なんつーのかなあほら、例えるなら部か同好会か、みたいな。殺し屋界は部だけど、殺人鬼界はまだまだ同好会つて感じつーか、規模とか組織性が。わかる? なんとなーくわかる?」

と、これは僕が訊いたときの子流九の回答。なんとなーく、わかつた。

というわけで。

これから『如何にして殺人鬼界は発展を遂げたか』という話をす る。いや別にしたくないんだけど、しなきやいけない。する責任がある。

といつのも実は僕 その発展にちょっと貢献しちやつた人物なのだ、不名誉ながら。

* * *

がらがらつと扉を開けると、子流九が大きなポニーテールをゆさゆさ揺らしながら、制服（上）を半脱いでいた。具体的にいうと胸のちょっと上らへんまで脱いでる。ちなみにスカートは脱ぎきつてる、つまり履いてない。下着は上下黒。かなりふらふらした（頭と目が）。

「あ、ごめん」

咄嗟に謝る。そして大きく目をそらす。油断してた。着替え中とは思わなかつた。……いや思わなかつたつていうか、よくよく考えたらここ美術室だしそもそも着替え必要ないんだから着替え中だつて思考に至るわけがない。えじやあなんで脱いでんの? 混乱する

僕。

「あーなんだ九々人かー。いいよ氣にしなくて。入れ入れー」

子流九はキャーとかそういうガーリーなリアクションはどうず、むしろ全てを受け入れながら半脱ぎ 全脱ぎ（制服をつて意味。ノット全裸）になった。えーなぜ。恐る恐る、目をそらしそらし、けど一応（なにが一応かわかんないけど）ちらちら見つつ、美術室に入り、後ろ手でゆっくり扉を閉める。

「でなに？ 告りにきた？ あたしがもうすぐ卒業するから？ ん？」

けらけら笑いながら子流九が机の上にがたつと座る。僕は彼女の質問を完全にスルーしながらちょっと離れた椅子に座る。ぱつと見、美術室には僕と子流九の二人きり。

「あのー、先生は？」

「手上？」 手上は職員会議。でもさーあたし思つんだけど、美術教師風情が職員会議でなに発言すんだろーね。絶対権力ないよねー先生というヒエラルキーにおいて美術教師風情。数学とか英語とかが総じて強いイメージあるよね、先生社会において。ね。ね？」

「え、うん、そうだね（後半聞いてなかつたので適当な返事）」「

「で、なに？ 告りにきた？ 告りにきたんだろ？ いいねいいねー、一月も終わりかけ、卒業を目前に控えたこの時期に？ 幼馴染であり部活の先輩であり美人で元気で気立てが良いこの九流子流九先輩に？ ずっと心の中にしまつっていた大切な想いを？ 放課後の美術室というベストショウエーションで？ ぶちまけちゃう？ かましちゃう？ いつちやう？ きちゃう？ おし、どんとこいー」「あ僕、別に気になつてる人いるから」

「ズコー」

ズコーって口に出して言う人初めて見た。漫画太郎的。

「つーか」机から、たすんと飛び降りる子流九。「誰よーその気になつてる奴つて。あたしというものがありながらあ

とかなんとか言いながら、すたすた僕の傍に歩いてくる。すたすた。僕は今世紀最大寝違えたみたいな角度になるまでぐぐぐいっと

首を曲げ、顔をそらした。

「あー……あのさ、というか子流九、服、着よう」

「D」

「は？」

「D」

「え、なにが」

「カッP。胸。これ。D」

「……あ、はあ、そう」

わー完全にワキ汗かいてる僕。そんなこと知るよしもなく、子流九はぐいぐい顔を近づけて喋りかけてくる（正直もうどれだけ目をそらしても視界の隅に黒い布地とふつらしたDが見えてる）。

「で、あんた何しにきたの実際。あーってかあれか、普通に考えて部活しにきたのか。そうよねーあんた一応幽霊だけど美術部だもんね。よし、じゃあ描いてく？ あたしのヌード。せつかくだし。減るもんじゃなし。代金は千円でよし」

「（安いな）えっと僕、静物画専門だから遠慮します」

「あたしの裸はもはや静物の領域だろがーい」

ぱしんっ、と僕の頬を平手打ちし、げらげら笑う子流九。全然意味がわからないのでとりあえず無視して、打たれた頬を撫でながら話を切り出す。

「あー、えっとね子流九、そのー、单刀直入に言うと」

一呼吸おいて、声を潜めて。

「君を殺しにきたんだ僕」

数秒の沈黙。

見つめ合う僕と子流九。

ふおーっ。

隣の音楽室から漏れ聞こえる、何やらラッパ的な音。

僕をまっすぐ見つめながら、子流九がゆっくり口を開く。

「……えー、普通すぎてクソつまんねえ

うん。僕も正直、そう思ってた。

僕は殺し屋で、子流九は殺人鬼で。

殺人鬼っていうのは多かれ少なかれ誰かしらに（誰かしらっていうかまあ遺族とかに）恨みを買って生きてるわけで。

だから、殺し屋である僕に、彼女の殺害依頼が来たってなんらおかしいことじやないわけで。

それって總じて、なんだか普通だなあ、日常だなあって思つ。その日常的普通を加減になんだか一気に全部冷めちゃつたのか知らないけど、子流九は脱ぎ散らかした制服をさくさくつと着て、ざくざくつと机を四つ繋げて、その上にだらしなく寝転がり、

「よおし、じやあ殺せよお、あたしは逃げないぞお、おおーー」もうほんと気持ちこもつてない感じでそんなことを言つ。

「というか子流九なんで脱いでたの」

「あたしクリエイティブモード時はデフォルトでヌーディストビーチよ最近」

「（なにに言つてんのかよくわかんないけど大体の予想で）つまりなんか作ろうとしてたの」

「そ。それー」

ふいつと子流九が教室の真ん中らへんの机を指さす。机の上には、大きな銀色のボール（球じやなくて料理とかで使うほう）が乗つている。席を立ち、近寄つて中を覗き込んでみる。何やらネズミ色のしつとり湿つた液体？ 固体？ がたっぷり入つていた。

「これ、粘土？」

「そ、ドンネー」

「なに子流九、陶芸とかやり始めたの」

「誰がやるかよジジイババアじやあるまいし」

とっても偏見に満ちた考えだなーと思ひはするけど口こぼしない。

子流九は寝つ転がつたままべらべら喋る。

「そうでなくてさー手上がさ。なんか、顔型とりてえつつてんだ、顔型。そのドンネーにあたしが顔を突つ込んで、出来た型を飾りたいんだ」と。ゆくゆくは美術部の女子部員全員の顔型を飾りたいんだ

と。変わったんなー一つーか、美術教師らしいなー一つーか、あたしの顔つて罪だなー一つーか、へへへ

もちろん、顔型という言葉を聞いた時点で僕はピーンときてる。ピーンときながらゆづくり考える。考えながら子流九に一つずつ尋ねてみる。

「身ノ坂先輩つて、美術部だよね」

「ん、そうよ。あいつ先月から入院しちゃつてやー、なんか顔大ケガしたとか言って、卒業制作完成せずじまいよ」

「歯島さんつて、美術部だよね」

「おう。つかあれ次期部長じゃんか。あーでもあいつも入院しちゃつたよねー、なんか顔ケガしてすぐえことなつちゃつたらしいね。かわいそうにー」

「膝倉さんつて、美術部だよね」

「膝倉ちゃんはお前、一年の中でもいつもばんいいよあれ。いやマジあたしが言うんだから間違いない。あたしあんまし人物画とかつて好きくねえけどあの子が描いたのは別もんだわ。でもなー、あの子今あれじやん、包帯ぐるぐるじやん顔。あれ完治するかなー。あの子さ今、自画像描きかけなんだ、タイミング悪いことに」

「えーと、あと誰だ、あと二人ぐらいいたつけ。美術部兼顔負傷してる女の子」

「ん、どうかなー どうかなー」

「ちなみに子流九、念のため訊くけど、顔泥棒つて知ってる?」

「は? ふざけんなよお前知ってるわそんなもん。なに、あたしのことバカにしてる?」

「いや、ううん、してない。むしろ、すごいなあとさえ思つてる今、うん」

実際、これだけヒントだだ漏れなのに気づかない子流九はちょっとすごいと思う。それはそれとして、どういう仕組みなのかなあと思つて目の前、ボールの中に並々入つてるネズミ色の粘土をじつくり見てみる。妙にぬらぬらてかてかしている表面、に、そつと顔を

近づけてみる。つんと鼻を刺す強い強い刺激臭。シンナー系のにおい。ああ、なるほど。もしかしてこのドンネー（感化された）、接着剤とか大量に混ぜ込んであるんじゃないかな、という考えに至る。多分あつてるとと思う。

「で九々人、あんた誰にあたし殺すよう依頼されたの」

「あのね子流九。殺し屋は絶対なにがあつても依頼人の名前は明かさないの。これ常識」

「二万でどう」

「膝倉さん」二万は魅力的すぎた。

「そつか膝倉ちゃんかあー…………えマジで」

がたんっと音を立てて子流九が起き上がる。まあそりや驚くか。と、続けてもう一つ、がたんっと音がした。見ると、美術室の扉が開いていて、手上先生が帰ってきたのかと思つたら扉の向こうにいたのは先生じゃなく用務員さんだつた。水色のつなぎを着て、右手に箸、左手に醤油の小瓶を持った、白髪頭で穏やかフェイスなおじさん。

「あー…………一人なんだ」用務員さんが誰に言つてもなく呟く。

「はあ、一人です」僕が返す。

「そつかあ…………じゃ、また後で来ます」お辞儀をする用務員さん。

がらがらっと扉が閉まる。数秒間の沈黙。

「…………九々人お」

「うん」

「今さあ、用務員のおつさんさ」

「うん」

「箸と醤油持つてたよね」

「うん、持つてたね」

「あれなに」

「さあ、晩ご飯食べるんじゃない」

「また、数秒間の沈黙。

「なんの話してたんだつけあたしり」

「膝倉さんの話」

「うおそうだ！ なんであたし殺意買つてんのそれ」

「いやーそこまではわかんないけど、殺しちゃつたんじゃないの子流九、膝倉さんの親とか」

「いやいやいやそれはねーよ。今年入つてあたしまだガキ七人しか殺つてねーもん。……あ、もしかしたら膝倉ちゃん弟妹いんのかな。えーどうかなーあたしあの子に嫌われんの結構つれーなあー」

「うーんとかうあーとか言いながら机の上に寝そべり寝返り、じろじろ脚をばたばたする子流九。」

「子流九、えーと、スカートの中見えてる」

「いやわざつきまでパンツ完全に見えてただろーが何を今さら。むしろ見り、田に刻め、そしてその記憶を今夜使え、使つてあたしに報告しろ」

とか非常にぐだらないことを言いながら、子流九はげらげら笑う。うーん。子供ばっかり七人殺すつていう残虐性、この目の前の姿からは全然想像つかない。でも「ほんとに殺したの？」とか訊こうもんなら「見る？」とか言つて携帯に入つてる陰惨な事件現場の写メ複数枚を無理やり見せられることになる（高一のとき見せられた。五歳ぐらいの女の子の裂かれた真つ赤なおなかの中に綿がぎゅう詰めになつてゐる写メ。タイトルはぬいぐるみ少女。模津かずおライク）。ぼんやりと写メを思い出してうつすら吐き気を催していると。

ざつ、と何かが僕の髪を掠めた。液体的なもの。

えつ、とそれが通過したほうを振り返る。床を見る。

じゅ、という焼肉屋的な音と、焼肉的じやない何かが焼ける匂い。あ、床、焦げてる。

振り返る。なにやら小さな茶色の小瓶（そういう童謡あつたつけホツホーみたいな楽しげなやつ）を持っている。そしてにっこり満面の笑み。

「あの、今になに

「酸つ！」得意げに胸を張る子流九。

「え、なんで酸」

「え、殺ろうと思つて」

「え、僕を」

「え、他に誰を」

「え、なんで急に」

「え、あたし殺人鬼なんだけど」

「え、知つてゐるけど」

「え、殺人鬼は急に殺してなんぼなんだけど」

「え、知つたこっちゃないけど」

「え、知つといて欲しいんだけど」

「え、わかつた」

ふうと肩をすくめながら子流九は空になつた茶色の小瓶を投げ捨て、脚を大きく広げてスカートの中、脚と脚との間にがばりと手を突つ込み、「あれーどこ行つたかなー、しまつといたはずなんだけどなー」とかぶつくさ言いながら、もぞもぞし始めた。相当はしたなくてだらしない格好。

「……僕、これ前から思つてたんだけど、子流九つてモテないでしょ、美人だけど」

「へへ、さんきゅー」

「いや前半に重きを置いて聞いて欲しかつたんだけど」

「あつた！」

ひょいとスカートから出した手には、また茶色の小瓶。

素早くその蓋を開け、ようとする子流九の手を掴、もうとする僕の手を子流九が足で払、おうとするその足をがちつと掴、むと今度は子流九が逆の足で僕の手を払、おうとするからそれをまた逆の手で掴む。

結果、子流九の両の足首を、両手でがっちりホールドしてゐる状態。見た感じマイルドな犬神家みたいになつてゐる子流九は、両手こそ空いてるものこの体勢じゃ僕に酸をかけれない。

「おい九々人、今この状況、どー見てもレイプ五秒前だぞー」「見ようによつてはそうかも知れないねー」「誰か来たらどうすんだよー」

「来るかなーそう都合よー」「来るもんなんだよー」「来るときには誰か来たらどうすんだよー」

「来るかなーそう都合よー」「来るもんなんだよー」「来るときには」

「そして僕らは沈黙する。」

「確かにそうだ、と思つ。」

大体こういうときは、本当に人が来る。それが人生だと思つ。

静寂。

隣の音楽室から微かに漏れ聞こえる談笑。見詰め合つ僕と子流九。そしてまた静寂。

張り詰めた空氣。

静寂。

空氣。

がら。

「ほら来たあ！」

僕と子流九はハモリながら扉のほうを向いた。

「……いや来たけど、なにやつてんだお前ら」「ぽかんと口を開けた手上先生が立っていた。

「レイプされそなんです」と子流九。

「殺されそなんです」と僕。

「美術室はそういうことする場所じゃないんだぞーお前ら」

まるつきりどうでもいい様子の手上。と、

「あああっ！」「とんでもなく大きな声を出して、手上は例のボールが乗つた机にばたばた走り寄る。

「お前、九流、お前、顔型、顔型、顔型」

「あ、すんません。まだつす」

「あーああお前、もうこれ固まっちゃつてる乾燥しきつちゃつてる、

あーやり直しだお前、あああ、ああああー、ああ

もう誰がどの角度からどの部分をどう見てもやばい人物だとわかる嘆き方。文字通り頭を抱えて、ごすつごすつごすつとおでこを何

度も机に打ち付ける手上先生。僕と子流九はそれをただただ呆然と見つめる。突然、バツと顔を上げこっちを見る手上。おでこ真つ赤。「九流、俺今から新しいの作つてくるからちょっと待つてくれるか。十分、いや五分でいい。待つてくれ。あと現^{うつ}、お前帰れ邪魔だ」

えー。いや僕いたら計画進まないのはわかるけどそんな言い方つてあるか。普通にちょっと傷ついた。と、子流九が「はーい」とのんきな返事。えー。ほんとに何もわかつてないのか子流九。手上は、うーんとかーとかどこ置いたつけーとか言いながら戸棚から戸棚へ美術室内をうろうろ。もう僕帰るうかなほんとに。と。がらがらつ。

もう何度目かわからない扉の音。今日来客頻度すごいなと思いながら、でももうなんかめんどくさくなつて扉のほうを見ない僕。子流九も見てない。手上も見てない。えー。誰か一人ぐらい見ようよ。しそうがないので僕が。しぶしぶ（ちなみにこの時点で僕はまだ子流九の両足をがっちり握ったまんま）扉のほうを見る。

用務員さんがぽつんと立つていた。箸と醤油の小瓶を持つて。

「あれ……まだ一人か」残念そうに呟く用務員さん。

「あ、三人になりました。先生もいます」顎でくいっと手上を指す僕。

「ああ本当だ。うーん、そうかあ」床を見ながらじばらく何やら考え込んで「まあ、いいかあ」と一言、用務員さんがゆらーっと美術室に入つてくる。そしてゆらーっと僕らに近づき、「いただきます」と小さく小さく囁いて、箸を大きく振りかぶり、子流九の後頭部へ振り下ろ「ぶなつ！」危ないつて言おうとして頭とお尻の音がかき消えた結果、木の名前みたいのを叫びながら、僕は握った子流九の両足を思いつきり右にぶん回す。面舵いっぽい的な。当然のように子流九は机から落ちてべつたんと床に落ちこちる。「ギャー！」わーいきつけられてギャ！ つて言つ人初めて見た。漫画太郎的。

「なにすんだよ九々人！ 顔が潰れんだろうが！」

その子流九の叫び声に、野生動物みたいな速度で手上が反応を示す。

「なにやつてんだ現！ 九流の顔を潰すな！ 九流の顔は俺のだろうが！」

えー。ついに言つちやつたこの人。ぽかんとする僕の目の前で今度は用務員さんが野生動物的俊敏な反応をする。

「九流さんの顔は、私のものです先生！ 私が醤油で頂くんです！..えー。思わぬ伏兵登場。手上が顔を真つ赤にする。

「なに言つてるんですか！ あー、えーっと、えー名前

「遠藤です！」

「遠藤さん！ 九流の顔は私のものですよ！ これはもううつと、もううつと前から私が目をつけていて」

「そんなこと言うなら先生、私だつてずっと前から！ 子流九ちゃんが入学したときからですね先生」

「なにをちゃん付けで呼んでるんですか遠藤さん私の子流九に！」
「なにを呼び捨てにしてるんですか先生私のコルちゃんに！」

「コルちゃんとはなんですか教師ともあるうものが..」

「いいえ私はただの用務員ですしがない！」

もう僕はただ啞然とするだけで精一杯。床に転がる子流九を見ると、まんざらでもなさそつた顔（要は極上の笑顔）で一人の攻防をうつとり眺めていた。

「あたしモテるなやつぱ」

「子流九、とりあえずそろそろ氣づこう

* * *

結論から言つと、『顔泥棒』は一人いたのだ。

身ノ坂先輩と歯島さんをやつたのが手上先生。強力接着剤を練り込んだ粘土で顔型を取り、皮を剥ぎとつちやう手口。膝倉さんをやつたのが用務員さん。手と箸で力任せにべりべり剥

ぎ取つた顔の皮を醤油でぱくつと頂いちやう手口。

ということで、二人とも間違いなく『顔泥棒』だった。

そして、お互に相手を『顔泥棒』だと言い張つた。

手上からすれば自分の獲物の顔を盗む用務員さんが『顔泥棒』。用務員さんからすればその逆で、手上が『顔泥棒』といつわけ。

「九々人おー」

「なに子流九」

「大人つてさ、なんか自分勝手だねー」

「あー、うん、僕もなんかそれちょっとと思つてた」

言い争い、罵り合い、取つ組み合いする大人たちを、美術室の隅つこの机に並んで座り、ぼーっと眺める僕と子流九。もうだいぶ日が暮れてきた。窓から赤い赤い光が射し、二人の顔泥棒の顔を照らす。

「九々人、あんた父親いないんだつけ」

「え、そうだけど、なに急に」

「いやあたしさー、父さんと母さんがあんな感じでよく喧嘩してたのよ。なんか見てたら想い出しちやつた」

「……ああ、そう。離婚、したんだつけ？」

「そうそう十歳んとき。親権争いつつーの？」 ちょうどあんな感じでねー、あたしを取り合つてねー。あー思い出しちつた。はー、しかし大人つてエゴいよねー」

頭をむしゃむしゃ搔き、ポニー・テールをぶるぶる揺らしながら、ぼんやり上、天井を眺める子流九。を、僕はじつと見てしまう。

「ん？ なんだよ」子流九が僕を見る。ちょっと困つたような顔。「ああ、いや別に」目をそらす。

へへつ、と小さく笑い、子流九が思いつきり僕のほっぺたをビンタする。「痛あつ！」「なに辛氣くせえ顔してんだよー九々人。だいじょーぶよ別に、今でも父さん母さんどっちにも会つてつしあたし。てかお前の親父こそ行方不明じやんか、お前の話のがよっぽど辛氣くせーわ」けらけら笑う子流九。確かにそうだ。というか父さ

んは、僕が小一のときに失踪していなくなつたので、法的には実は既に死亡扱いになつてゐる、んだけど、まあそれ言ひと本格的に湿つぽくなりそうなので言わないでおく。

泥棒泥棒と言い争いながら、用務員さんが箸を振りかぶり、手上先生が瓶入り接着剤を振り放ち迎え撃つ。僕らはプロレスの観客みたいな気分で、やれーそこだーとか囃し立てて笑う。

「でもさー九々人」

子流九が脚をぶらぶらさせながら言う。

「あたし思つたんだけどさ、やっぱなにどうしたつて大人にはなつちやうよね、あたしもあんたも。人間だもん。だったらさ、あたしらもさ、遠慮しねえでちゃんとエゴくなんなきやすぐ殺されちゃうよね世界から。あんた殺し屋やってるじゃん。でも今あんた一人でやつてるでしょ？ それ儲かんないし、危ないよね？ なんかあっても守つてくれる人誰もいねえじやん。ハイリスククローリターン。これダメ。でもあたしもそう。殺人鬼は別仕事じゃねえけど、でもちょっとミスればあの一人みたいに衝突起こりつるじゃん。それダメよね。じゃあどうするか」

子流九が、びしつと僕の顔のど真ん中を指さす。

「これから時代、アウトサイダーも組織化が必要つてことよ」
なるほど。さっぱりわからない（そもそもあんまりちゃんと聞いてなかつた、父さんのこととか考えてた）ので、とりあえず曖昧に頷いておく。子流九はひょいと机から降り、ぱんぱんつと手を叩いた。

「はーいやめやめ終わり終わり終わーってあれ？ 片付いてる？ もしかして」

見ると、手上先生と用務員さんが、強く強く握手を交わしていた。えースボ根的。

* * *

三十分後。

日も暮れきつてもうすっかり夜。

手上先生と用務員さんはそれはそれはワクワクした顔で、子流九に手を振り振り、帰つていった。

「じゃあ九流よろしく。頑張ろうなー」

「はーいこちらこそよろしくつ

「コルちゃん、困つたことあつたらなんでも言つてね、よろしくね

「へへへ、さんきゅでーすよろしくー」

がらがらがらつ、かたん、と扉が閉まる。

久しぶりの静寂。

ふうーと息を吐き、子流九が大きく伸びをする。「つはあ。……つーわけで」くるつと僕のほうを向き、完全なキメ顔で丶サインを見せる。

「本日、東京都殺人鬼協同組合を設立することとなりました」

「……あ、そう」

「先生らの力と知恵を借りながら、しつかりかつちり組織化して、あたしら殺人鬼の自由と権利を守りつつ、殺人鬼界の活性化と発展を目指したく思つておりまつす！」

「……あー、うんまあ、頑張つて」

もう全然子流九が言つてる意味はわかんなかつたけど、でもこんなに自信とやる気に満ち満ちた顔見せられたら、僕は何も言えなかつた。それでなんだか全然関係ないけど、あー子流九もうすぐ卒業しちゃうんだなあ、とぼんやり思つた、なぜか。

「大学、美大行くんだっけ子流九」

「そうよ。あんたも来れば？」

「え、うーん。考え方く

と言いながら、あ多分これ僕行くな子流九とおんなじ大学、とうすら確信していた、なぜか。

「よーし帰ろ帰ろ、つてあーその前に」

子流九が鞄を肩に掛けながら僕をぎろつと見る。

「あんたが気になつてゐる奴つて誰よ」

「うわー結構それ気になつてゐるな子流九、と思いながら、言おうか言つまいか」一秒悩んで、

「膝倉さん」言つちやつた。

「えーマジか。なるー」ふむふむと頷く子流九。

「うーんまあ、気になつてゐるつていうか、そこまででもないんだけど、実はえーと、告白されちゃつて、こないだバレンタインに。それで、少し、気になつちゃつてるかもなー僕つていうかあれ？」

子流九もしかしてちょっと落ち込んでる?」俯く子流九の顔を覗き込んでみる。

「わーお殺したいわーお前のその自意識」くすくす笑う子流九。「あつ、つか膝倉ちゃん、あれじやん。あたしの殺害依頼してきんじやんあんたにそういうや

あ、そうだ。僕もちょっと忘れてた。というか僕、子流九殺しきたんだつたそり言えれば。完全に忘れてた。今から済ませるか。いやでももうだるいが今日は。明日でいいか。というか、いつでもいいか。子流九は、にまにましながら、なるほどねー、そういうことねー、だからあたしをねー、とかぶつぶつ言つてはいる。まったくなんのことかわからない。僕はそれを尻目に、自分の鞄を持ち、肩に掛け、窓を閉め、カーテンを閉め、手際よく帰り支度を済ませて振り返り「子流九、帰」ざつ。

何かが僕の髪を掠めた。液体的なもの。というか絶対、酸。

そして目の前には、小さな茶色の小瓶を高々と掲げた、笑顔の子流九。

「殺人鬼界の発展を祈つて、かんぱーい」

「はい乾杯」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1908v/>

西新宿アシッドハイスクール九々九式

2011年7月26日03時40分発行